

徳島大学・明治大学・徳島県連携事業

事業のポイント

- 各機関による教育・研究活動の包括的交流と連携・協力の推進による教育・研究の進展。
- 各機関が持つ教育資源や知的財産等を活用した社会貢献と人材育成。

事業の概要

1. 事業の目的

本事業は、徳島大学、明治大学、徳島県の教育・研究活動の包括的な交流と連携・協力の推進により、わが国の教育・研究の一層の進展に資することを目的とするともに、各機関がそれぞれ持つ教育資源、知的財産及び人材と歴史、文化、自然を活用した連携事業を通じて、地域社会への貢献と人材育成に寄与することを目的としている。

2. 連携協議会

平成29年6月9日(金)、第4回目となる連携協議会が、明治大学生田キャンパスにおいて開催された。協議会は各機関から担当者が出席し、平成28年度に各機関が連携して実施した事業について報告を行うとともに、平成29年度に実施する連携講座等の事業が提案・審議され、承認された。

なお、この協議会は、各機関持ち回りで開催されることになっており、平成30年度は徳島大学において開催される予定である。

3. 連携事業

第5回目となる連携事業は、本学が主担当となり、明治大学の公開講座であるリバティアカデミーの一環として、平成29年10月8日(日)にオープン講座『板東俘虜収容所とベートーヴェンの「第九」～日本初演百年の国際交流～』を開催し、約350人が受講した。

今回、講座のテーマとして「第九」を取り上げたのは、第一次世界大戦中の1918年に徳島県の板東俘虜収容所でドイツ兵俘虜(捕虜)達により「第九」の初演が行われてから来年で100周年を迎えることを踏まえ、ベートーヴェンが「第九」に込めた想いを百年にわたる国際交流の歴史と重ね合わせることで「第九」日本初演の真の意義を受講者に考えてもらうためであった。

基調講演では、徳島大学大学院社会産業理工学研究部の井戸慶治教授から板東俘虜収容所の概要の解説後、明治大学大学院文学研究科の井戸田総一郎教授から、シラーの詩とベートーヴェン「第九」について、徳島大学石川栄作名誉教授から戦後の交流復活について、講演が行われた。

再現演奏では、文京区民オーケストラにより、「ドナウ川のさざなみ」など、俘虜たちが収容所で演奏した記録が残っている曲を当時と同じ編成の弦楽合奏で演奏後、井戸田教授の指導の下、受講者全員により、ドイツ語で明治大学混声合唱団とともに「第九」より「歓喜に寄す」を合唱した。

パネルディスカッションでは、石川名誉教授のコーディネ

事業代表者・連絡先

吉田 和文(地域連携戦略室長、理事(地域・産官学連携担当)、副学長)
〒770-8502 徳島市南常三島町1-1
tel: 088-656-9752 fax: 088-656-9880
e-mail: chkoukenc@tokushima-u.ac.jp

ネットのもと、講演者の井戸教授、井戸田教授に加え、南川教授、徳島県石浜久美子国際課友好交流担当室長により、百年にわたる国際交流の歴史と意義について考えた。

4. 今後の展開

連携事業は本学と徳島県が交互に主担当として開催しており、平成30年度は徳島県を主担当として、開催を予定している。

本事業では、このほか、各機関が持つ教育資源を活用した授業やフィールドワークの開講、研究や学生の交流等、地域社会への貢献や人材育成への寄与、教育・研究の進展を目的とした様々な事業を実施している。



オープン講座リーフレット



ドイツ兵の演奏を再現する文京区民オーケストラ



「歓喜に寄す」を合唱する、明治大学混声合唱団と受講者



パネルディスカッションの様子